

研究者（香川颯真 前田圭太 三浦卓弥 南松祥子）

### 1. 研究テーマ

急性期病棟における転倒転落に関する情報共有およびチェックリストを用いた環境確認が転倒転落発生率に与える影響

### 2. 研究の背景

入院患者の転倒転落は骨折、頭部外傷などの重大な有害事象につながるだけでなく、在院日数の延長や患者の QOL 低下を招く重要な看護安全上の問題である。当病棟においても昨年度の転倒転落発生率が例年と比較して増加しており改善すべき課題である。インシデントレポートの振り返りから以下の傾向が明らかとなっている。

- ・夜勤帯における発生に集中していた。
- ・高齢患者・転倒転落危険度Ⅱの転倒が多く見られていた。
- ・単独で離床しようとした事例が多かった。

入院時・入院中に既存の転倒転落アセスメントスコアシートにて評価はしているが、スコア結果が環境調整に十分反映されていない現状がある。また、ハイリスク患者に関する看護師間の情報共有が申し送りにおいて定型化されておらず、対応に個人差が生じている可能性がある。

### 3. 目的

本研究では申し送り時の転倒転落に関する情報共有を新たに導入すると共に、ハイリスク患者に対するチェックリストを用いた環境確認を実施する事によって転倒転落を減らせるかを評価する。

### 4. 方法

研究デザインは介入研究(介入前後比較)である。

- ①各勤務交代時の申し送りに転倒転落の情報共有を必ずおこなうように変える。

ベッドマップに危険度・具体的な注意項目を掲示する

- ②ハイリスク患者（転倒歴がある患者、レベルⅢの患者）に対しては、スタッフ

2人以上でベッドサイドにて周辺環境を目視で確認し環境が不適切な場合は当該箇所を整備しその結果を記録に残す。（目視で確認する時は作成したチェックリストを使用する）

- ③2 病棟看護師 18 名

## 5. 評価方法

- ・延べ入院患者日数あたりの発生率（入院患者あたりの転倒件数の割合）
- ・看護師へのアンケート調査による介入効果の評価  
導入 1 ヶ月後      導入 6 ヶ月後
- ・研究対象患者は DST B ランク以上、転倒転落アセスメントシート 2 点以上、認知症の既往があることに該当する患者 調査期間は R 8 7/1～12/31 R9 7/1～12/31

## 6. 参考文献

- ・転倒転落アセスメントスコアツールに関する提言」日本転倒予防学会 2020
- ・アセスメントツールの導入でわかった転倒転落を防止する鍵」  
医療安全推進ネットワーク

## 7. 研究責任者

2 病棟（急性期一般病棟）      師長      吉田   幸子